

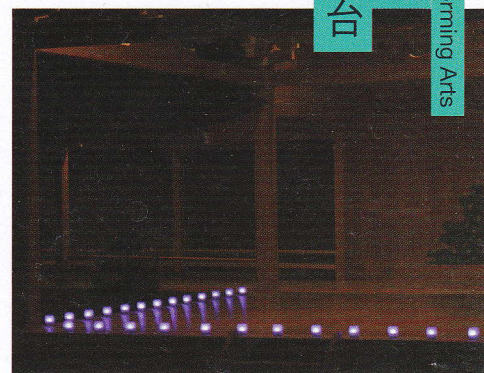
青のゆらぎ ~LEDキャンドル能~

Traditional Performing Arts
芸どころ
名古屋舞台

能・狂言の舞台に、優しい明かりで差し色をしてみたら…

能や狂言ではふつう、大がかりな舞台装置や照明が用いられることはありません。どの演目も、背景は、松の木を描いた鏡板のまま。いま登場人物がどんな場所にいるのか、周りがどんな風景なのかは、せりふや謡の中に盛り込まれ、観客の想像にゆだねられます。そんなシンプルな舞台が特徴の能・狂言ですが、たまには、ちょっとだけ冒険してみたい。たとえば水彩絵の具でさっと一筆なぞるように、舞台に一色差してみたら…。なんという巡り合わせでしょう。現代の科学技術の結晶であるLEDは、600年も前から続く能・狂言に、ぴったりの明かりだったのです。今回の企画では、水量豊かな川と、果てしなく広がる大海原を、いま話題の青色LEDでいどります。

イヤホンガイド／米田真理<朝日大学准教授>



狂言「入間川」

シテ(大名)／井上 松次郎

アド(太郎冠者)／佐藤 融

アド(入間ノ何某)／鹿島 俊裕 後見／今枝 郁雄

「ある」と言えば「ない」ことを指し、嬉しいときは「嬉しくない」という。そんな逆さ言葉の遊び「入間様」をめぐる狂言です。

訴訟のため長らく都で過ごした東国の大名が、ようやく帰郷できることになりました。旅を続けていくと、大きな川にさしかかります。対岸の人に、ここはどこかと問えば、入間(埼玉県南部)との答え。渡るのに適当な浅瀬を問えば、ここは深いから上流へ回れ、と教えます。だが大名は忠告に従わず、深みにはまらずぶ濡れに。大名は、この土地で使われる入間様だと思ったのにと怒り、入間の人を成敗しようとし。ところが、入間の人が言うには、それなら助かった、入間様なら、成敗するとは成敗しないことだから、と。面白くなった大名は、入間の人と言葉遊びを楽しみますが…。どこまでが真意で、どこからが逆の意味なのか?そんな理不尽な展開が楽しい作品です。

能「俊寛」

シテ(俊寛僧都)／久田 勘 鷗
ツレ(平 康頼)／山中 雅 志
ツレ(藤原成経)／久田 勘吉郎
ワキ(赦 免 遣)／高安 勝 久
アイ(船 頭)／野村 又三郎

笛／鹿取 希世
小鼓／後藤 嘉津幸
大鼓／河村 総一郎

地謡／伊藤 裕 貴・松山 幸親
吉沢 旭・清沢 一政
八神 孝 充・梅田 邦久
本田 勲・久保 信一郎

後見／祖父江 修 一・久田 三津子

『平家物語』を題材に、絶海の孤島にただ一人残されることになった人間の、次第に追い詰められていく状況を描いた能です。

平家政権へのクーデターを企てた罪で、俊寛と成経・康頼は、太平洋上の孤島・鬼界が島に流されています。折しも、中宮の御産にともない大赦が行われることとなり、使いの船がやってきます。やっと都に帰れると喜ぶ三人。だが赦免状の文中に、成経・康頼の名は記されていても俊寛はありません。俊寛は慌てて使いの者に詰め寄ったり、紙の裏表を確かめたりしますが、やがて事態を察して涙します。そして成経・康頼を乗せた船は、すぐるよう後を追う俊寛を振りきって漕ぎ出され、俊寛は一人とり残されてしまいます。

この能をモデルに作られた文楽や歌舞伎「平家女護島」では、青い波を幾重にも描いた大道具が印象的に用いられます。今回の能の演出は、青色LEDの幻想的な光によって、能舞台の上に大海原を作り出す試みです。



※やむを得ず演目等を変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

やっとかめ文化祭

時をめぐり、文化を旅する、まちの祭典。

2015.10.30-11.23 名古屋市内各所にて毎日開催[全25日間]

やっとかめ文化祭実行委員会事務局 (公財)名古屋文化振興事業団内 〒460-0008名古屋市中区栄三丁目18番1号
ナディアパーク8階 Tel 052-249-9385 Fax 052-249-9386 www.yattokame.jp やっとかめ文化祭 検索



YATTOKAME FESTIVAL
Travel in Time, Experience Culture!
Nagoya City Festival

歴史まち歩き
寺子屋
まちなか
名古屋舞台
芸どころ
まちなか披露
芸どころ

この印刷物は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。